

# 東大模試 解答・解説

## PART 1

### 解答

第1問	.....	1
第2問	.....	2
第3問	.....	2

## PART 2

### 解説

第1問	.....	3
第2問		
問(1)(a)	.....	5
問(1)(b)	.....	5
問(2)(a)	.....	6
問(2)(b)	.....	7
問(3)(a)	.....	7
問(3)(b)	.....	8
第3問		
問(1)	.....	9
問(2)	.....	9
問(3)	.....	9
問(4)	.....	9
問(5)	.....	10
問(6)	.....	10
問(7)	.....	10
問(8)	.....	11
問(9)	.....	11
問(10)	.....	11

第1問 (28点)

工業力の発展した西欧諸国は海外進出を進め各地を原料・農産物の供給地や商品市場として組み込んでいった。貿易が世界規模になる**商業革命**が起こり、西欧では新大陸からの銀の流入により**価格革命**が起こった。東欧は西欧への穀物の輸出を担うようになりグーツヘル  
5 ルシャフトと**再版農奴制**が広まった。アメリカは銀の供給や砂糖などの商品作物の生産を担い、インディオを労働力とする**エンコミエンダ制**が成立したが、その人口減を受けて大西洋三角貿易の構造のなかでアフリカから黒人**奴隷**が導入された。アフリカは奴隷を供給し、労働力を失って社会は打撃を受けた。**産業革命**以後は、西欧は  
10 アジアをも従属的な地位として組み込んでいった。インドはイギリス製の機械制綿布の流入により綿産業が打撃を受けて一次産品の輸出国となった。オスマン帝国には**カピチュレーション**を利用して西欧が経済的進出を進めた。東南アジアではコーヒーなどの商品作物の栽培が行われジャワではオランダによって**強制裁培制度**が実施さ  
15 れた。中国は自由貿易を要求するイギリスに**アヘン戦争**で敗北し、**朝貢貿易**体制が動揺し西欧主導の貿易体制に組み込まれていった。

第2問 ((1)(a)・(2)(b)：各3点, (1)(b)・(2)(a)・(3)(a)・(3)(b)：各4点 計22点)

(1)

(a)ディオクレティアヌスは大迫害を行ったが、コンスタンティヌスは公認したほか教義の統一をはかり、テオドシウスが国教化した。

(b)叙任権闘争を経てヴォルムス協約で教皇権が確立され、インノケンティウス3世の時代は君主を圧倒したが、君主権が強化されていく一方で教皇権はアナーニ事件や教会大分裂により失墜した。

(2)

(a)正統性を示すため民族宗教のゾロアスター教を国教とし聖典アヴェスターの編纂などの整備も行った。ユダヤ教やキリスト教などの他宗教にも比較的寛容だったがマニ教やマズダク教は弾圧した。

(b)一神教の性格を継承し、モーセやイエスを預言者、聖書を啓典として認め、両宗教の信徒は啓典の民として信仰の維持を認めた。

(3)

(a)マウリヤ朝のアショーカやクシャーナ朝のカニシカは仏典結集を支援するなど保護し、グプタ朝時代にはナーランダー僧院が設立され、ヴァルダナ朝ではハルシャが玄奘を厚遇するなど保護した。

(a)仏図澄や鳩摩羅什が来訪し布教や仏典漢訳を行い法顕がインドを訪ねたほか、雲崗や竜門などに石窟寺院が造営された。寇謙之は新天師道を創始して道教を確立し北魏の太武帝はこれを国教とした。

第3問 (各1点×10 計10点)

(1)イ

(2)ミトラ教 (ミトラス教)

(3)バクティ運動 (バクティ信仰)

(4)キュリロス

(5)ワヤン

(6)ウルドゥー語

(7)マジャール人 (ハンガリー人)

(8)乾隆帝

(9)クルド人

(10)コソヴォ

## 第1問

# 世界の一体化とその影響

## 1.16世紀から18世紀前半まで

### ●総論

15世紀末に大航海時代が開幕して以降、西欧諸国は、それまで直接の交易関係になかったアジアやアメリカへと進出していく。

工業力の発展した西欧諸国は、アメリカやアフリカから、原料や農作物の供給地、あるいは工業製品の市場として、自らが主導する世界的な経済システムに組み込んでいった。こうして、西欧諸国を中心とする世界的な経済システムの構築が進み、世界の一体化が進行していった。

### ●西欧

大航海時代における西欧による積極的な海外進出によって、商品の産地・量・取引がアメリカやアジアをも含む世界規模のものとなる商業革命が起こった。そして、西欧における商業の中心は、ヴェネツィアなどの地中海沿岸からアントワープなどの大西洋沿岸へと移った。

また、ポトシ銀山を代表とするアメリカ大陸からの銀の流入のため、銀の価値の下落により激しく物価が高騰する価格革命が起こった。

### ●東欧

ポーランドやプロイセンなどの東欧地域は、小麦やライ麦などの穀物を、西欧諸国へ

とさかんに輸出するようになった。このような穀物の輸出を背景として、東欧では、地主が大農場において農奴に労働させて穀物などの生産を行うグーツヘルシャフト（農場領主制）、農民への束縛が改めて強化された再版農奴制が形成され広がった。

### ●アメリカ

アメリカでは、当初は進出したスペインによって銀などの鉱物資源が採掘され、その後はタバコや砂糖などの商品作物のプランテーションの経営が行われた。

スペイン人たちは、キリスト教化と保護を条件として王室から先住民の使用を認められるエンコミエンダ制を利用して、先住民のインディオを鉱山やプランテーションでの労働に使用した。しかし、スペイン人の持ち込んだ伝染病や過酷な労働によってインディオが減少すると、次に述べるように、アフリカからの黒人奴隷を代替りの労働力として使用するようになった。

### ●アフリカ

アメリカ大陸においてインディオが伝染病や酷使によって激減した後、代替となる労働力として導入されたのが、アフリカからの黒人奴隷であった。

17世紀から18世紀は特に奴隷貿易がさかんで、大西洋三角貿易と呼ばれる、西欧・アフリカ・アメリカを結ぶ貿易が展開された。この貿易は、西欧の商人が工業製品をアフリカで販売した後、アフリカで奴隷を買い付けてアメリカへと運び、そこで売られた奴隷が砂糖などの商品作物の生産に従事させられる、という仕組みで、西欧主導の貿易であった。

アフリカはこうして若い男性の労働力を多数失ったことで、社会的・経済的に大きな打撃を受けた。

### ●アジア

この段階においては、西欧諸国はアジアに対してはそのネットワークに参入して利益を獲得するのにとどまった。

西欧諸国は、インドの綿布、中国の茶、東南アジアの香辛料などのアジアの物産を銀を対価として購入したため、アジアへと銀が流入した。その結果、中国では一条鞭法や地丁銀制が成立している。

## 2.18世紀後半から19世紀半ばまで

### ●総論

18世紀半ば頃から、イギリスをはじめとする西欧諸国の産業革命や資本主義の発展によって、世界の一体化は新たな段階を迎えることになった。

### ●インド

インドはイギリスなどの西欧諸国に対する綿布の輸出国の立場にあったが、イギリスで産業革命が起こったことで、その構造に変動が生じた。イギリスの安価な機械制綿布がインドに流入するようになり、インドは綿布の輸出国から輸入国の地位へと転じたのである。

このため、インドの伝統的な綿産業は打撃を受けて壊滅し、原料である綿花や、アヘンなどの農産物を供給する立場に置かれた。

### ●トルコ

オスマン帝国は、16世紀にフランスに授与したのを初めとして、西欧諸国に対して領事裁判権や租税免除などを認めるカピチュレーションと呼ばれる特権を与えた。

本来、カピチュレーションは恩恵的な措置であったが、オスマン帝国が衰えていくと、西欧諸国による経済的侵略の足がかりとして利用されるようになった。

### ●東南アジア

東南アジアでも、18世紀頃から列強の進出の性格が変化していった。それまでのように既存のネットワークに参入するのにとどまるのでなく領土の支配をも狙い、支配下に置いた地域で世界市場向けの商品作物の栽培を行うようになったのである。

東南アジアではコーヒーやサトウキビなどの商品作物が生産され、ジャワではオランダ総督ファン＝デン＝ボスによって強制栽培制度が実施された。

### ●中国

中国は19世紀に入っても伝統的な冊封体制・朝貢貿易体制を維持していた。

イギリスは中国から茶を購入し銀を支払うという片貿易の構造の打開を狙い自由貿易を求めてマカートニーやアムストを派遣したが中国が応じなかったため、イギリスはインド産のアヘンを利用した三角貿易を展開し、これは結局アヘン戦争へとつながった。

アヘン戦争の結果、清朝は敗北し、これ以後朝貢貿易体制が動揺し、中国も西欧主導の貿易システムへと組み込まれていくことになった。

## 第2問

# 政治権力と宗教

### 問(1)(a)ローマ帝国とキリスト教

#### ●総論

キリスト教は、ローマ帝国領内で生まれ、そしてローマ帝国において発展した宗教であり、ローマ帝国とキリスト教との関わり合いは深い。

当初、ローマ帝国は、ネロ帝による迫害などの一部の例外を除いて、キリスト教に対して積極的に干渉しようとはしなかった。しかし、帝国内でのキリスト教の広がりを受けて、4世紀の初め頃から、キリスト教に対して働きかけを行うようになっていく。

#### ●ディオクレティアヌス

3世紀末から皇帝位についたディオクレティアヌスは、皇帝権の神聖化をはかって皇帝崇拜を強制したが、キリスト教徒はこれに従わなかった。そのため、ディオクレティアヌスは、303年にキリスト教徒の弾圧を命じ、以後、教会の破壊や信者の公職追放などを行った。この弾圧は「大迫害」と呼ばれる。

#### ●コンスタンティヌス

ディオクレティアヌス帝の退位後に抗争を経つつ即位したコンスタンティヌスは、キリスト教の広がりを前に、帝国の統一の維持のためには懐柔することが得策と判断し、313年にミラノ勅令によってキリスト教の公認を発表した。

また彼は教義の統一の必要性を認識し、325年にニケーア公会議を開催して、アタナシウスの説を正統とした。

#### ●ユリアヌス

こうしてキリスト教は国家公認の宗教となったが、コンスタンティヌス帝の少し後に皇帝となったユリアヌスは、ミトラ教などの異教の復興を企てた。そのため、彼は後世のキリスト教徒から「背教者」と称されることになる。しかし、彼はまもなくして遠征中に戦死したため、この異教復興の動きは短くして終わることになった。

#### ●テオドシウス

4世紀末のテオドシウスの時代には、他宗教が禁止され、キリスト教が国教とされた。こうして、帝国の辺境で生まれたキリスト教は、とうとう国家の宗教にまでなったのである。

### 問(1)(b)君主権と教皇権の関係

#### ●総論

中世のヨーロッパにおいては、皇帝・国王などの世俗の君主と、キリスト教のヒエラルキーの頂点に立つ教皇との間で、その権限をめぐって衝突が起こった。

#### ●教皇権の確立

神聖ローマ帝国(ドイツ)では、オットー1世以来、教会組織を皇帝権の強化に利用する帝国教会政策がとられていた。しかし、10世紀頃から起こった教会改革運動も背景として、皇帝と教皇との間で叙任権闘争が開始さ

れることになった。

11世紀後半には、神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世と教皇グレゴリウス7世が聖職叙任権をめぐる対立し、結局、カノッサの屈辱事件で皇帝が屈服することになったが、その後も対立は継続した。

その後、この対立は、1122年に皇帝ハインリヒ5世と教皇カリクストゥス2世との間でヴォルムス協約が結ばれたことで、いちおうの妥協が成立する。聖職叙任権は基本的に教皇が持つということが決定され、これによって、教皇権が確立されたと評価される。

### ●教皇権の発展

ヴォルムス協約以後、教皇権は伸張・発展していき、12世紀末から13世紀初めの教皇インノケンティウス3世のときに絶頂に達する。インノケンティウス3世は、神聖ローマ皇帝オットー4世、イギリス王ジョン、フランス王フィリップ2世ら世俗君主を次々に破門し、「教皇権は太陽、皇帝権は月」という言葉を残すなど、世俗君主を圧倒した。

### ●教皇権の動揺・衰退

こうして頂点まで達した教皇権であったが、十字軍の失敗や王権の強化によって、13世紀後半から動揺を見せ、さらに衰退していく。

14世紀初め、教皇ボニファティウス8世は、聖職者課税問題を契機にフランス国王フィリップ4世と対立したが、アナーニ事件においてフィリップ4世側に捕らえられた。これは教皇権衰退を示す象徴的事件となった。

つづいて、教皇クレメンス5世がフィリップ4世によってフランス南東部のアヴィニヨ

ンに移転させられ留められる、アヴィニヨン捕囚(教皇のバビロン捕囚)が起こった。

こうして7代69年間にわたりフランス内に留められた後、いったんは教皇のローマ帰還が行われたが、続く教皇をめぐるフランスと、英・独・伊などが対立し、それぞれ別の教皇を擁立したことから、以後40年間続く教会大分裂が起こった。このような教会の混乱により、教皇の権威は失墜することになった。

## 問(2)(a)ササン朝の宗教政策

### ●総論

ササン朝の支配するイランでは、伝統的宗教のゾロアスター教の信仰が根付いていた。しかし、ササン朝の領内には、その他にも、キリスト教・ユダヤ教・仏教などの宗教を信仰する民族が居住しており、またゾロアスター教の異端も現れてきた。これらの諸宗教に対して、ササン朝はさまざまな政策を使い分けて対応を行った。

### ●ゾロアスター教

ササン朝は、自らがアケメネス朝の正当な後継者でありイランの伝統を受け継ぐことを主張し、そのためにイランの伝統宗教であるゾロアスター教を国教に定めた。そして、聖典『アヴェスター』を編纂し、炎の祭壇の形式を取り決めるするなど、ゾロアスター教の教義や儀式の整備に取り組んだ。

### ●キリスト教・ユダヤ教・仏教など

ササン朝の領内には、キリスト教・ユダヤ教・仏教などを信仰する民族が存在した。ササン朝は、ゾロアスター教を強化・普及する

過程でしばしば弾圧を行うことはあったものの、これらの宗教に対してはおおむね寛容な対応をとったと評価されている。

### ●マニ教・マズダク教

ササン朝においては、ゾロアスター教の異端ともいえる2つの宗教が現れた。

特に重要なのが、ゾロアスター教にキリスト教・仏教などの要素が加わって成立した**マニ教**である。**シャープール1世**の時代には保護されたとも言われるが、その後ササン朝はマニ教に対して激しい弾圧を行った。

もう一つが土地財産の共有など急進的な主張を持つ**マズダク教**である。**ササン朝はマズダク教を危険視し、皇太子時代のホスロー1世は弾圧を行い、壊滅させている。**

## 問(2)(b)イスラームとユダヤ・キリスト教

### ●ユダヤ教・キリスト教による影響

イスラーム教は厳格な一神教であるが、このような一神教の性格は、ユダヤ教・キリスト教の特質を受け継いでいると考えられる。また、偶像崇拜の禁止や、最後の審判の観念なども基本的には共通している。

### ●ユダヤ教・キリスト教に対する姿勢

イスラーム教は、ユダヤ教とキリスト教に対して、他の宗教とは異なる特別な扱いをしていた。

イスラーム教は、ユダヤ教のモーセやキリスト教のイエスをムハンマドに先立つ預言者として認めており、また『旧約聖書』・『新約聖書』も神からの啓示が記された啓典として認めている。

そして、両宗教の信徒に対しては、このよ  
うな啓典に従った信仰を持つことから「啓典  
の民」として、ジズヤの支払いを条件に信仰  
の自由や生命・財産の保護を認めるなど、他  
の異教徒よりも優遇した。なお、後にはゾロ  
アスター教徒や仏教徒にもそのような扱いが  
拡大された。

## 問(3)(a)古代インドの王朝と仏教

### ●総論

開祖ガウタマ=シッダールタの時代にマ  
グダ国の王族から支援を受けていたように、  
仏教は完全に世俗と断絶していたわけでは  
なく、しばしば王朝とも関わりを持った。  
特に、北インドの王朝との関わりは大き  
かった。

### ●マウリヤ朝

マウリヤ朝の第3代国王のアショーカは  
征服戦争を進め難敵のカリング国を滅  
ぼしたが、その後改心して仏教に帰依し、  
仏教を保護したと伝えられている。

彼は、仏舎利(仏陀の遺灰)を再分配して各  
地にストウーパ(仏塔)を建設したほか、  
首都パータリプトラにおいて開催された  
第3回仏典結集を支援し、また各地への  
布教を行ったと言われている。スリランカ  
(セイロン島)への布教には、王子の  
マヒンダを派遣したとの言い伝えられて  
いる。

### ●クシャーナ朝

クシャーナ朝の**カニシカ王**は、初め  
仏教を軽視していたが、改心して仏教  
を保護するようになったとされる。彼  
は首都**プルシャプラ**の郊外に大塔を  
建設し、カシミールにおいて



行われた第4回仏典結集も援助したと言われている。

### ●グプタ朝

グプタ朝時代には、仏教はヒンドゥー教におされて民間での勢いが衰え気味であったが、仏教の教理研究など学問的な面では活発であった。

5世紀前半に、グプタ朝第4代の王によってラージャグリハの近くにナーランダー僧院が設立されたが、この僧院は仏教教学の中心として栄え、中国の法顕などの僧も訪れている。

### ●ヴァルダナ朝

ヴァルダナ朝時代には、ハルシャ=ヴァルダナが仏教を保護し、中国から来訪した玄奘を厚遇している。

なおこの後、インドにおける仏教は、ヒンドゥー教の隆盛や、拠点である都市の衰退などを要因として衰退していき、さらにイスラム勢力による攻撃にも追い討ちをかけられ、13世紀頃までにインド亜大陸からほぼ消滅することになった。

## 問(3)(b)魏晋南北朝時代の仏教と道教

### ●仏教

南北朝時代は、仏教が中国社会に浸透し発展した時期であった。華北の五胡十六国時代以降に成立した北方民族による国家で仏教が受容されたほか、江南でも貴族層の間に広まっている。

この時期の仏教の注目すべき動向としては、まず仏僧の活動が挙げられる。西域のクチャ(龜茲)出身の僧ブドチンガ(仏図澄)や

クマラジーヴァ(鳩摩羅什)は、華北を訪れ、布教や仏典の漢訳を行った。一方、中国からは東晋の僧法顕が正しい戒律を求めてインドへと向かった。そのほか、道安は、このように布教しつつある仏教の戒律の整備・明確化に取り組み、その弟子である慧遠は、念仏により浄土への往生を願う結社の白蓮社を結成し、浄土宗の祖となった。

また、インドの仏教文化の影響を受けて石窟寺院が造営されるようになり、西域方面の敦煌のほか、華北の雲崗・竜門などで石窟寺院がつくられた。

### ●道教

仏教の普及の影響も受けつつ、道教についてもこの時期に新たな展開が見られた。

道教は、老荘思想に、陰陽五行説・神仙思想などの民間思想が融合して形成された信仰である。すでに後漢末の張角による太平道や張陵による五斗米道(天師道)において、宗教結社としての形を見せ始めていたが、魏晋南北朝時代になって宗教としての形式を確立する。

北魏の道士寇謙之は、張陵の天師道を継承すべしとの啓示を受けたと自覚し、天師道を受け継いで発展させた新天師道を開始した。そして、寇謙之は北魏の太武帝に近づいて信任を得て、その結果、太武帝によって道教は国教化された。

## 第3問

### 民族文化と民族問題

#### 問(1)イ

ギリシアの詩人についての選択肢ア～エのうち、誤りを含むものの記号はイである。

サッフォーは、レスボス島生まれの古代ギリシアの女性叙情詩人である。レスボス島で生まれて女性たちと生活を送り、恋愛詩を残したことで知られる。

ギリシアの三大悲劇詩人は、『アガ멤ノン』を制作したアイスキュロス、『オイディプス』のソフォクレス、『メディア』のエウリピデスである。一方、アリストファネスは『女の平和』などで知られる喜劇詩人である。

ギリシアの三大悲劇詩人は選択問題などで頻出なので、少なくとも選択肢を見て正しいかどうか判別できるようにはなっておいてほしい。

#### 問(2)ミトラ教

牛を殺して血をすするなどの儀式を持つイラン起源のある密儀宗教で、軍人や商人の間で多くの信者を獲得したのはミトラ教である。

ミトラ教は、イランを起源とする、光明神ミトラを信仰する密儀宗教である。牛を殺して血をすする儀式を持つことで知られる。イランからローマ帝国に伝わって、その男性的性格から、軍人や商人の間に多くの信者を獲得した。

ミトラ教は、東方由来であることや救済思想などの点でキリスト教との類似性が強く競合的關係にあったため、ユリアヌス帝が好んだように、キリスト教と異教との対立・闘争においても注目すべき存在となった。

#### 問(3)バクティ運動

シヴァとヴィシュヌなどのヒンドゥー教の神へ絶対的な帰依を捧げる運動は、バクティ運動と呼ばれる。

バクティ運動は、シヴァやヴィシュヌなどヒンドゥー教の神々に絶対的な帰依を捧げる運動である。ブラフマー・シヴァ・ヴィシュヌはヒンドゥー教の三大神とされるが、このうちシヴァとヴィシュヌの二神が教徒の信仰を二分して集めた。そして、7世紀頃の南インドで、この二神などへ絶対的な帰依を捧げるバクティ運動が始まり、この運動は後に北インドへも広がっていった。

なお、これらのインドの神々は、大乘仏教のなかにも取り込まれ、大乘仏教を通じて日本にも名前を変えながら伝えられることになった。このため、ヒンドゥー教の神々は、実は日本の文化のなかにも溶け込んでいるのである。

#### 問(4)キュリロス

9世紀のギリシア正教の修道士で、スラヴ人への布教のために文字を作成したのはキュリロスである。

キュリロスは、9世紀のギリシア人修道士で、スラヴ人へのギリシア正教布教のためにグラゴール文字をつくった人物である。キュ

リロス、問(7)でも触れる**モラヴィア王国**からの宣教師派遣の要請を受けて、兄とともにビザンツ皇帝から派遣されたが、その際に布教を容易にするためにスラヴ人のための文字としてグラゴール文字を作成した。

現在のロシアなどで使用されている**キリル文字**は、キュリロスのつくった文字そのものではなく、彼の後に弟子たちがギリシア文字を参考につくったものだと考えられている。いずれにしても、キュリロスがスラヴ人のための最古の文字をつくり、現在のキリル文字の成立にも大きな影響を与えたことは確かであり、歴史的な意義は大きいので、覚えておきたい。

## 問(5)ワヤン

クディリ朝の時代などに発展した、ジャワ島に伝わる影絵人形劇の名は**ワヤン**である。

**ワヤン**は、インドネシアのジャワ島に伝わる、牛の皮を細工した人形を使った影絵人形劇である。10世紀から13世紀にジャワ島の東部に存在した**クディリ朝**などの時代に発展した。

ワヤンは、その題材として、古代インドで成立した『**マハーバーラタ**』や『**ラーマヤナ**』がさかんに使用されたことでも知られる。このように、ワヤンはインドと東南アジアの文化交流の証としても重要なので、名前を覚えておいてほしい。

## 問(6)ウルドゥー語

インド北部の口語にペルシア語やアラビア語の語彙が融合して成立した言語は**ウル**

**ドゥー語**である。

**ウルドゥー語**は、インド北部の口語をもとにペルシア語やアラビア語の語彙が取り入れられて成立した言語である。語彙のほか、アラビア文字による表記などの点で、イスラームの影響が見られる。

ウルドゥー語は、ヒンドゥーとイスラームの融合例として重要であるほか、現在のパキスタンの国語となるなど、歴史的な重要性が高いので、必ず覚えておいてほしい。

## 問(7)マジャール人

モラヴィア王国を崩壊させ、スロヴァキア人を支配下に置いた民族は**マジャール人**（ハンガリー人）である。

**マジャール人**（ハンガリー人）はウラル山脈南西を原住地とし、西方に移動してパンノニアに定住してハンガリーを建国した民族である。マジャール人は原住地から西進して諸民族を攻撃し、**チェコ人**や**スロヴァキア人**などのスラヴ人が建国した**モラヴィア王国**も崩壊させ、スロヴァキア人を支配下に置いた。

もとはチェコ人とスロヴァキア人同じ系統の民族であったが、チェコ人が神聖ローマ帝国の影響下に置かれ、スロヴァキア人がマジャール人の支配を受けるなど異なる歴史的体験を経るうちに、しだいに民族的な差異が形成されることになった。20世紀に両民族がチェコスロヴァキアとして一つの国を形成したが、同世紀末に分離したことも記憶に新しい出来事である。

## 問(8)乾隆帝

18世紀半ばにジュンガルや回部を討って新疆を版図に入れた清の皇帝は**乾隆帝**である。

**乾隆帝**は、清朝の第6代皇帝で、康熙帝や雍正帝に続いて清の全盛期を現出した人物である。対外面では、**ジュンガル**や**回部**を討って、東トルキスタンを支配下に組み込んで「**新疆**」と命名した。この新疆が、現在の新疆ウイグル自治区のもとになっている。

中国のモンゴル・チベット・ウイグルなどの自治区については民族問題が存在するが、これらの地域が中国領内に組み込まれたのは清朝の時代のことであり、現在の中国はそれを根拠として領有を主張している。このような現代的問題について、歴史的経緯や問題点を認識しておきたい。

## 問(9)クルド人

現在のトルコ・イラン・イラクにまたがる地域に居住し、それぞれの国で少数民族として抑圧されることになった民族は、**クルド人**である。

**クルド人**は、現在のトルコ・イラン・イラクなどにまたがるクルディスタンと呼ばれる地域に居住する民族である。オスマン帝国の支配に服したが、オスマン帝国が解体された後、トルコ・イラン・イラクの国境に分断されて、いずれの国においても少数民族として抑圧されることになった。

クルド人問題は、イラクの**サダム＝フセイン**による弾圧が取り上げられるなど、最近でも注目されている問題なので、確実に知っておきたい。

## 問(10)コソヴォ

現在のセルビアとアルバニアの間に存在する地方は**コソヴォ**である。

**コソヴォ**は、現在のセルビアとアルバニアの間に存在する地域である。中世のセルビア王国は12世紀末にビザンツ帝国からコソヴォを獲得して領有したが、14世紀末この地においてオスマン帝国との間で行われた**コソヴォの戦い**で敗れた。その後、オスマン帝国の支配を避けてセルビア人が他へと移住し、空白のできたコソヴォにはアルバニア人が入植し多数派となった。近代には、**第1次バルカン戦争**の結果、セルビアに編入され、そのままユーゴスラヴィア領へと移行したが、ユーゴスラヴィア解体後にコソヴォ紛争が起こった。

このコソヴォ問題についても、中世以来の長い歴史が現在にまで影響している。こうした現代的な問題について、歴史を知ることによって本質的な問題点を見抜いて理解するようしてほしい。